

学校建築と地域社会

——京都府南山城村における学校施設の複合化と学校統廃合の事例から——

四 方 利 明

目次

はじめに

1. 京都府南山城村における学校施設の複合化と学校統廃合
2. 南山城村立南山城小学校
3. 旧南山城村立田山小学校
 - 3-1 田山小学校校舎
 - 3-2 地域社会の中の田山小学校校舎
 - 3-2-1 運動会
 - 3-2-2 田山花踊り
 - 3-2-3 廃校舎活用

むすびにかえて

はじめに

日本の学校建築は、明治の中期以降、教室を直列につなぎ、その北側に廊下を配置するという、北側片廊下型校舎を全国一律に整備するという方向で、標準化、画一化されてきた。このような傾向が現在でも続いている一方で、1980年代以降、これまでの北側片廊下型校舎に代わる、新しいタイプの学校建築を模索する動きも出てきており、大きくは二つの動きを指摘することができる。一つは、オープンスペーススクールの導入であり、もう一つは、学校施設の複合化である。オープンスペーススクールとは、教室と廊下の間の壁をとっばらい、教室と廊下の間にオープンスペースを挿入させるタイプの校舎である。一方、学校施設の複合化とは、学校に学校以外の公共施設、たとえば、図書館、公民館、保育園、高齢者福祉施設等を併設させることであり、学校施設の複合化を推進する側がねらいとしていることは、少子高齢化社会、「生涯学習社会」をにらんで、それぞれの施設が相互連携することであり、そのことを通して「学校と地域社会の連携」を図ることである¹⁾。

従来の学校建築に関する研究は、建築計画学、及び教育方法学の分野が中心であった²⁾。そこでは、「個性化」「生涯学習」「学校と地域社会の連携」「開かれた学校」といった1980年代以降の教育改革におけるキーワードを軸に、教育改革の流れに対応しうる上記のような新しい学校建築を整備し、活用していくことの重要性が語られてきた。これまで学校建築が語られる際には、学校建築の持つ様々な側面の中でも、学校教育の機能を担う装置としての側面に焦点が当てられがち

であったといえよう。

本稿では、学校建築が学校教育を支える役割を担ってきただけでなく、とりわけ地域社会とのかかわりにおいて、多様な機能や意味を担ってきたことに着目する。そのことによって、新しい学校建築を導入する際に持ち出される教育改革言説の相対化を目指しつつ、教育的な機能に限らない、学校の持つ多様な機能や意味について考えてみたい。

1. 京都府南山城村における学校施設の複合化と学校統廃合

上記の目的のために、本稿では、学校施設の複合化が学校統廃合とセットで行われた、京都府南山城村の事例に着目する。

京都府南山城村は、奈良県、三重県、滋賀県と県境を接する、京都府唯一の村であり、全国有数の茶の産地である。1955年に、高山村と大河原村の合併により南山城村が発足して以降、村の人口は4000人前後で推移し、2009年6月30日現在の人口は3331人である³⁾。村は、田山、高尾、押原、奥田、今山、本郷、南大河原、月ヶ瀬ニュータウン、野殿、童仙房の10区からなる（正確には月ヶ瀬ニュータウンは自治会）。

村内には、これまで田山、高尾、大河原、野殿童仙房の4つの小学校があった。田山小学校区は田山区、高尾小学校区は高尾区に重なり、本郷区に位置する大河原小学校は、本郷、押原、奥田、今山、南大河原、月ヶ瀬ニュータウンの6区を校区とし、野殿区と童仙房区の間地点に両区を校区とする野殿童仙房小学校が位置する。

京都府南山城村では、2002年度をもって村内にあった4つの小学校のうち、田山、高尾、大河原の3小学校が廃校となり、2003年度より統合先の南山城小学校が、保育園、保健福祉センターとの複合施設として開校した。そして、2005年度には残る野殿童仙房小学校も廃校となり、2006年度より南山城小学校に統合され、現在では1村1小学校となっている。

学校統廃合が行われることになったことの背景の一つが、少子高齢化である。廃校となった小学校の一つである田山小学校の場合、学級数は、戦後ほぼ一貫して1学年1クラスで推移してきた。児童数は、1960年代くらいまでは100名を超えていたのであるが、70年代以降100名をきり、1998年度からは複式学級を設置するまでに児童数が減少し続け、田山小学校最後の年度となった2002年度の児童数は28名であった⁴⁾。こうして、2002年度をもって閉校し、新設南山城小学校に統合されるに至ったのである。ちなみに、1村1小学校となった直後である、2006年5月1日現在の南山城小学校の児童数は、152名である⁵⁾。

この南山城村の事例について考察するために、筆者を研究代表者とする共同研究を組織し、2002年から2009年にかけて南山城小学校（併設された保育園、保健福祉センターも含む）、旧田山小学校、旧高尾小学校、旧大河原小学校をそれぞれ複数回訪問して実地調査を行い、併せて施設の活用状況等について施設関係者から聞き取り調査を実施した。また、廃校となった田山、高尾小学校のある田山区、高尾区において、地域住民に対して聞き取り調査（半構造的インタビュー調査）を行った。田山区での聞き取り調査は、2004年8月3日～5日、11月2日、2005年5月6日～7日に、15世帯から、高尾区での聞き取り調査は、2005年7月30日～31日に、16世帯から実施する

ことができた。さらには、大河原小学校区のうち大河原小学校が所在する本郷区においても、地域住民7名から座談会形式によって聞き取り調査を行った（2008年9月13日）。地域住民に対する聞き取り調査の内容は、廃校となった旧田山小学校、旧高尾小学校、旧大河原小学校と地域住民とのこれまでのかかわり、新設の南山城小学校、および併設された施設と地域住民とのかかわり⁶⁾についてである。以下の記述は、これらの調査データに依拠している。

2. 南山城村立南山城小学校

2003年度より学校統廃合による統合校として新たに開校した南山城村立南山城小学校⁷⁾は、保育園、保健福祉センターとの複合施設である。開校にあわせて発行された同校の学校案内パンフレットでは、『「地域に開かれた学校」』として、特別教室を開放し、『生涯学習の村宣言』にふさわしい新たな中核施設として、地域活力を生かせる施設整備を行って」と述べられ、「隣接する保育園及び保健福祉センターと相互の連携を図」ることが明記されている。「生涯学習」社会をみすえ、併設された施設どうしの連携を通じて、学校と地域社会の連携を目指すという、学校施設の複合化が推進される際の典型的な語り口を確認することができる。

ちなみに、同パンフレットでは、「多様な学習形態に対応し、子どもたち一人ひとりの個性を生かし」た環境整備を図っているとも書かれ、実際、小学校の普通教室部分は、オープンスペーススクールタイプの造りとなっている。先に確認したように、「個性」「生涯学習」といった1980年代以降の教育改革のキーワードをちりばめつつ、新しい学校建築の動きを主導するというのが、従来の学校建築言説によくみられる語り口であり、その点でこの南山城小学校は、1980年代以降の新しい学校建築の動向を具現化しているとみてよいだろう。

南山城小学校校舎を設計したのは、リチャード・ロジャースである。建築にかかった総費用は約23億円⁸⁾であり、この金額は南山城村の一年分の予算額に匹敵する。月ヶ瀬ニュータウンに近い土地を新たに三層に造成し、一番低いゾーンに保健福祉センター、ついで一段高いゾーンに保育園、そしてもっとも高いゾーンに小学校が位置する。

小学校の校舎は、原色数色を組み合わせたカラフルな外観であり、二階建てとなっている（地下に駐車場と給食センターがある）【写真1】。1階に、ランチルームや図書室、家庭科室などの特別教室が直列に配置され、それらに並行して広くて細長い多目的ホールが付随している【写真2】。1階の来客用のエントランスとは別に、中1階に学年毎に分節された子どもたちの昇降口（児童用エントランス）があり、子どもたちは昇降口から1階と2階に分かれて、それぞれ特別教室と普通教室へと至るようになっていく。2階には普通教室が1学年1教室ずつ配置されている。2学年、すなわち2教室毎に1つのオープンスペースが付随する形になっている。オープンスペースは、普通教室と廊下の間に挿入され、それぞれを仕切る壁は存在せず、オーソドックスなオープンスペーススクールの造りとなっている【写真3】。

昇降口が複数に分節されていたり、1階多目的ホール上を中1階から2階へと至る空中階段が架けられていたり、1階の特別教室に囲まれたスペースに半屋外半屋内のウッドデッキ（テラス）が設けられたりするなど【写真4】、単調な動線となるのを少しでも避けて、遊びの余地を挿入さ

写真1. 南山城小学校外観



写真2. 南山城小学校1階多目的ホール（右は特別教室群，左は児童用エントランス）



写真3. 南山城小学校2階普通教室（一番奥が普通教室，その手前はオープンスペース（ワークスペース），さらにその手前は廊下）



写真4. 南山城小学校1階テラス



写真5. 南山城小学校へアプローチする階段（右手前は保健福祉センター、右奥は保育園）



せようという試みがみられる。また、1階部分に来客用エントランスと特別教室を配置し、2階部分に普通教室や職員室などをまとめることで、1階部分を「地域に開かれた学校」として地域住民に開放することを想定していることがわかる。

村内各地から子どもたちを運んでくるスクールバスは、小学校へと続く133段もの長い階段の一番下に到着する。子どもたちはこの階段を通り、右に保健福祉センター、保育園を順に見ながら小学校へ登校する【写真5】。他の施設やその利用者を見ながらの登校は複合施設の目的に合うようにも思われるが、両施設の入口は階段側には存在せず、階段とは建物を挟んだ反対側に両施設の入口があり、保育園と階段の間は柵で仕切られている。

このように、小学校と併設された施設とで動線は隔てられているが、かかわりがまったくないわけではない。たとえば、保育園児が小学校の運動場で遊んだり、小学校の授業を見学しにいたりしているという¹⁰⁾。また、小学生が主として総合的な学習の時間に、保健福祉センターのデイサービスの利用者¹¹⁾と交流を図っているという。

南山城小学校に対する印象を地域住民に尋ねたところ、外観の色彩、暑さ、費用の点で否定的な反応が目立った。たとえば、南山城小学校の計画に関与していた田山区のAさん（60代、聞き取り実施当時。以下、同じ）は、「あんな色、知らんだわ。…模型は、白やもんな」と語り、実際に出来上がってきた際のカラフルな色彩に驚きの念を隠さない。また、高尾区のBさん（50代）は、「冬はええのかしらんけど、夏はちょっと、暑いかなあ、冬は床暖房もはいってますしねえ」と語り、ガラスを多用していることもあり夏の暑さが尋常ではないことを証言している。また、村会議員であった田山区のCさん（80代）は、次のように語っている。

私たちが議員だった時に、だいたい26億っていう予算でしてん。ところが54億もかかってます。そのために、この村は随分といま疲弊困憊というんですか、予算の問題で、なかなか感情的な問題になってます。（その影響は？ という問いに対して…筆者注）ええ、そりゃ補助的なもんはだいぶ減らされました。たとえば、どういうのかなあ、村の高齢者っていうんですか、それとか青年団であるとか婦人会であるとか、そういうようなところに対する補助をしていましたわ。そういうところが随分減らされてきてます。で、やっぱりこの辺の道路が非常によくないので、それを改良しようとしてもなかなかその金が出ないと。やっぱりその学校のためだけ引いてます。これは言えると思うんですわ。まあ当時はね、この村も先ほど言いましたように、学校があちこち建って非常に不合理な点があると。教育上の問題でも大変なことで、そういうことからひとつに固めると。固めるについては、自然を活かした、いわば、緑の山の中に自然を活かした校舎を建てようやないかという当時の村長、森山村長の希望でしたんで。そりゃあ私たちも、私も賛成しておりました。ところが、ああいう建物から見たら、なんて言うのかなあ、いま考えたら、どういうこっちゃよう解らんようになって。外国の建築家が設計されるということについては、どうも我々は納得できんともありますねん。とても学校とは思えんような、けばけばしい。

先に述べたように、公開されている小学校建設の総工費は約23億円であるが、土地の造成費や他の施設の建設費等を含めると、さらに費用がかかっていることが推察できる。また、それだけお金をかけて造った校舎ではあるが、この方も、その外観の色彩には不満をもっていることがわかる。

では、複合施設の目指す施設間の連携について、地域住民はどのように感じているのだろうか。社会福祉協議会の理事をされている関係で、保健福祉センターに度々出向くという高尾区のDさん（60代）は、次のように語っている。

（小学校と保育園と保健福祉センターの…筆者注）3つともかかわりないみたいや。なぜか、いうたらね、小学校の人に保育園のこと聞いても、知らんいうしな。ほんで、まあ、僕、福祉協議会の方も、保育園のとこ行かないしな。保育園は保育園で、小学校は小学校で、みな独立して、あんまりかかわりはしてへんような感じやで。あとは、同じ場所にあるっちゅうことは、あるんだけど。

建築家のクリストファー・アレグザンダーは、自然発生的な都市が、諸要素が混在シクロスする構造（＝セミラチス構造）をなしているのに対し、人工的に計画されたニュータウンが、それぞれの要素が分離されクロスしない構造（＝ツリー構造）をなしていることを明らかにし、「都市はツリーではない」と論じた¹²⁾。このツリー／セミラチスという概念を借りれば、学校施設の複合化を考える際に、極めてツリー的な構造をなす学校という場が多少たりともセミラチス的な場へと変容する可能性がありうるかどうかということが分析視角の一つとなりうるのではないか。

ツリー／セミラチスという観点から複合施設としての南山城小学校をみると、まず動線の他に施設と隔てられており、また小学校と他施設の利用者どうしでかかわりがあるとしても、教

育的にプログラム化されたかかわりであり、さらには、地域住民にとっても校舎そのものの印象がよくなり、他施設との連携も認識されていない。このように、学校と他施設、あるいは学校と地域住民とで、想定外の出会いが生ずる余地があまりないという点において、複合施設としての南山城小学校は、ツリー構造であるといわざるをえない。

「学校と地域社会の連携」を意図した学校複合施設が、ツリー構造となってしまうとするならば、そもそも、学校は地域社会とかがわりをもたずにきたのだろうか。そこで考えてみたいのが、廃校になった小学校の一つ、田山小学校の校舎と地域住民とのかかわりについてである。

3. 旧南山城村立田山小学校

3-1 田山小学校校舎

1874年創立の田山小学校は、128年の歴史を持つ。創立当初は、諏訪神社に隣接する観音寺を仮校舎としていた。後に、敷地内に校舎が新築されるが、小学校内に駐在所が設置されるなど、当初から田山地区のコミュニティセンターとしての役割を担ってきた。ただ、この校舎は、たびたび大風雨災害を受け繰り返し破損された。

室戸台風襲来の翌々年、1936年に、敷地を移転し、木造校舎が新築された。移転先は、諏訪神社・観音寺とは川を挟んでほぼ300メートルほど離れた地点であり、諏訪神社・観音寺と同じく田山地区が一望できる高台である。諏訪神社・観音寺と田山小学校の両高台間の300メートルほどの道が、田山地区のいわばメインストリートになっており、そのちょうど中間地点には、旧笠置中学校高山分校¹³⁾の跡地に建つ農業者トレーニングセンターがあり、農村婦人の家が併設され田山区の「事務所」的存在となっている。

田山小学校の1936年築の木造校舎は、廃校までの66年間にわたって現役校舎として使い続けられ、さらに後述のごとく、廃校後も学校教育とは別の用途で活用され続けている。田山小学校の敷地は、メインストリートから一直線に上昇する20メートルほどの坂道を登りきったところにある【写真6】。敷地の北半分を運動場が占め、校舎は敷地の南半分に、北を上にしてコの字型に配置されている。コの字の口が開いた部分に講堂が位置する。校舎は、平屋で瓦屋根の木造校舎であり【写真7】、校舎の中に入ると、北側片廊下型のオーソドックスな造りでありながら、すべてが木材で建てられた校舎には独特の気品がある【写真8】。1936年築とは思えないほど傷んでいる箇所が見当たらず、当時の大工が丁寧な仕事をし、さらにその後この校舎が大切に使われてきたであろうことが推察できる。竣工当時、「もう、どんな台風が来ても大丈夫という、頑強な木造校舎、その柱の太さに驚いたものでした」というエピソードが残っている¹⁴⁾。また、Eさん（60代）は、田山小学校校舎が、地元の木材を用い、地元の大工によって手がけられているがゆえに、しっかりしていると証言してくれた。

講堂が造られたことも、当時強い印象を与えたようである。先ほどのCさん（80代）は次のように語っている。

（旧校舎は…筆者注）校庭は狭いし、昔の学校ですから、いろんな時に学校の教室を開け放し

写真6. 田山小学校校門



写真7. 田山小学校外観（左奥の運動場に突き出た部分が放送室）



写真8. 田山小学校廊下



て机を片づけて、いろいろ式をしましたけど、入学式、卒業式、いろんなことについて一同に集める場がなかったわけです。ですから、教室を、一年生の教室、二年生の教室の真ん中をなしにして、机やいすはまた廊下に出して、そういうところでそういう式をしていたわけですね。それが、田山小学校ではそんなことするのいらない、講堂というのがちゃんとありましたし、画期的なことで、すばらしい学校やと、私たちは思っています。

オープンスペーススクール型の校舎が必要であることの根拠として、多目的に使用できるオープンスペースを教室に付随させ、さらには教室とオープンスペースの仕切りをオープンにして可動式の家具を置くことで、「個性」的な教育にフレキシブルに対応できるようにする必要がある、ということがよくいわれる。田山小学校の旧校舎に関するこのエピソードは、オープンスペーススクールを導入するはるか以前の校舎が、時には教室、時には講堂として、まさにフレキシブルに使われていたことをモノ語っており、大変興味深い。しかし、当時の子どもたちにとって、集会や儀式のための専用の講堂ができたことは、大きな誇りであったのだろう。

田山区の地域住民、とりわけ田山小学校卒業生にとって、この木造校舎には相当強い思い出がある。田山区小学校を卒業し、その後教員として再び田山小学校に帰ってきたFさん（50代）の次のような語りは、そのことをよく物語っているであろう。

廊下を歩くでしょ、廊下をね。廊下歩いたり、各教室に行きますよね。それで、自分の小学校の頃のまの物があるわけです。落書きも、まあちょっと消してあったけれど、私は長い間、あいあい傘を描かれてましたんでね、講堂の所にね。で、私の名前と女の子の名前がずっ

写真9. 田山小学校中庭にある洋式庭園



と描かれていて、小学校の時に、遊びに行くと背中ですべてを隠すんですよ。そこから動かない。で、中学校ぐらいになって見に行ってもまだ落書きあったんですけど、私が（教員として…筆者注）行った時はもう多分消されてたと思います。まあ、そういうこともありますし、まあ、いわゆる柱の傷もですよ。で、コの字型の廊下を歩いていると、…私Fというんですが、小さなF君がやってくるんですよ、向こうから。で、その当時の、あの、大体半ズボンはいたりですね、ランニング着たりしてやっていますね。だから当時のこう幻が見える気がする、幻は見えてないですよ。見えてないですが、見える気がするんですよ。だから、私が廊下を歩いていると、向こうから小学生のF君がやってくるというような、…まあ、そういう感じですね。小学生の、そのやっぱり小学生の自分と今の自分がおるんですよ。小学生の自分が向こうにいるわけですから。だから全てがそういう感じでしたね。それは本当に強く感じましたね。

ところで、田山小学校の校舎は、1936年から70年もの間、竣工当時のまま寸分変わらずに現在に至っているのではない。時々小さなアレンジが加えられ、校舎がそこで生活する人々によって存分に使われてきた痕跡を残している。

たとえば、コの字型校舎に囲まれた内側は中庭となっているが、中庭にしつらえられている洋式庭園は、1959年に、育友会の手によって後から造られたものである【写真9】。瓦屋根の木造校舎の雰囲気と合っているかどうかは微妙であるこの洋式庭園は、この学校で過ごす子どもたちに強い印象を残す場所となっている。田山小学校で印象に残っているモノを尋ねたところ、Gさん（10代）は、「私はあの、中庭にある、何か訳のわからない何か像。それとか、トーテムポールもあったかな。なかったかな。あと、池の、なんか魚。…何か置物みたいな。…何か真ん中ら

辺にあったような気がする。…いつもそこを飛んで、遊んで」と答えてくれた。

ほかにも、1968年には、講堂の舞台裏に、「隠れ部屋」(Fさん(50代))のように音楽室が新設された。戦前は、この音楽室のスペースには御真影が安置されていたらしい(Hさん(50代))。なお、この講堂の舞台裏とは別に、御真影を保管するために運動場の一角に建てられた奉安殿は、戦後観音寺に移され、納骨堂として「再利用」されている。また、現在運動場に面して放送室となっているスペースは、もともとは昇降口であり、放送室に改造されたのは、1995年のことである¹⁵⁾。

3-2 地域社会の中の田山小学校校舎

田山小学校の校舎は、小学校に通う子どもたちや、教員だけが使っていたのではない。田山小学校は田山地区のいわばコミュニティセンターとしての役割を担い続け、地域住民がさまざまに校舎を使ってきた歴史が存在する。

Iさん(60代)は、「物心覚えるようになった時にはもう、まあ、小学校っていうのは地域の文化の中心みたいなもん」だったと語り、講堂において、青年団主催の演芸会や映画会が開かれていたことを指摘する。

演芸会の本番はもちろん、その練習も講堂で行われており、Hさん(50代)は、教室と違い、講堂は「憩いの場」であり、練習の合間には飲酒もしていたと語る。また、Jさん(50代)は、講堂だけでなく、運動場においても映画会が催され、映画のキスシーンに子ども心に衝撃を受けたこと、しかし、教員が来るわけではなく学校はノータッチであり、完全に地域のイベントであったことを語ってくれた。

このように、田山区の方々からの聞き取りを通して、田山小学校校舎が地域住民と強いかかわりをもってきたことがみえてきたのであるが、この点で印象深いエピソードは、運動会と、田山地区に伝承されている雨乞いの儀礼である田山花踊りのエピソードである。

3-2-1 運動会

まずは、運動会からみてみよう。ここで運動会というのは、あくまで田山小学校の運動会のことである。田山地区での運動会といえば、小学校の運動会とは別に、田山区の運動会が、先述の農業者トレーニングセンターのグラウンドで行われてきた。にもかかわらず、小学校の運動会には、小学校に通っている子どもやその親、祖父母のみならず、田山聖愛保育園の保育園児や、各種団体、たとえば田山花踊り保存会や消防団、婦人会なども競技に参加したという。区の運動会と合同ということではなく、あくまで小学校の運動会に、学校の成員ではない地域住民が参加し、小学校の運動会が地域社会にとっての「祭り」のごときイベントであったのである。

田山小学校の運動会に関して、Kさん(50代)は、次のように語る。

K : 最近は、教育関係の場で、アルコールとか飲んだらあかんとか、最近は聞くやろ？
だけど、昔はそんなこと、なかって。缶ビール片手に応援したり、昼飯の時は、呑んだり。

聞き手：屋台が出ていたりしたのでしょうか？

K : 屋台いうほどのものはないけど、たこ焼き屋さんとか。あの、下に郵便局ありますよね？ あの向かいの方に、たこ焼き屋さんとか、ピストルとか、面とか、綿菓子とか、三、四件くらいは、坂道の下で。

聞き手：それっていつぐらいまで、出てたんですか？

K : えーとなあ、うちのボウズ、うちの子どもの時は、出てたな。

聞き手：お金でものを買うっていうのを校内でってのは…

K : だから、校内と違って…

聞き手：校外！

K : 校門より下やから。だから、おじいさんおばあさんやら、その孫に買ってあげたり。親が買うんちごて、じいちゃんばあちゃんがな、休みにやで、あの昼のご飯の、休みに。一時間くらいの間に。…運動会は、昔は10月の3日って決まってる、…だから各種団体も、小学校の運動会参加しなんからって、予定とかもう早めに運動会って入れてある。…田山の間人やってたらもうたいてい、何かの団体には二つも三つも。

聞き手：それは、新しい小学校になってから、一切やらなくなっちゃったんですかね？

K : 新しい小学校のことは全然、もう、全然知らんなあ。実際行ってないさけなあ。かわりが、全然ないから。どうなってんのかわからへん。運動会、見に行ったこともないし。

この聞き取りを行った頃、ある新聞記者が、かつて勤務した北海道の運動会では酒を呑んでいたことを懐かしむ記事を書いたところ、読者からは「教育活動の場に酒は論外」といった多数の抗議投書が寄せられたという¹⁶⁾。今日の学校の運動会は、親や祖父母に「参観」者が限定される教育的な「学校行事」なのである。しかし、田山小学校の運動会は、屋台までもが出店し、ビール片手に「見物」する、田山という地域社会にとっての「祭り」のごときイベントであったのである。しかも、この語りに登場するKさんの子どもさんは、1981年生まれであるから、小学校時代は1980年代の後半から1990年代にかけてであり、少なくとも1980年代までは、「祭り」的な運動会であったと推察できる。また、屋台が、厳密には校門の下、つまり小学校の敷地へと続く20メートルほどの坂道の下に出ており、この坂道が、学校のウチとソトを隔て、かつ媒介する「境界」としての意味を担っていることも興味深い。

同様の語りは、他の地域住民の方からもなされている。たとえば、Aさん（60代）は、運動会では大人たちがビールを「大量に」呑んでいたことを証言し、さらに次のように語っている。

出店さんは出てはった。あら商売や出店やな。それもPTA、育友会呼んだわけでもないし、区が呼んだわけでもないし、育友会の人に来てるわけでもないけど。ああいうはその、いわゆる露店商やろうな、露店。ああいう人はまた聞いて調べてな。（娘さんの時も出店は出ていたのかという問いに対して…筆者注）来てたんちゃうか。面売ったり。たこやきぐらい来てたんちゃうか。ほんで全部一緒に、外で食べる人もいるし、講堂でな、あの講堂、あっこでお昼子どもと一緒に食べんねん。子どもと一緒にお昼食べて。かなりやっぱりな、お客さんも多かったよ、来てくれる人も。

先ほどのKさんの話と同様、屋台が出て飲酒をとまなう、地域社会にとっての「祭り」としての小学校の運動会の様子が語られているが、Aさんの娘さんは現在30歳代後半であるから、やはり少なくとも80年代初めくらいまでは、このような運動会であったと推察できる。また、講堂でお昼を食べたということが語られているが、先述の青年団の演芸会においても講堂が「憩いの場」として使われており、後述する田山花踊りの際にも、準備会場として講堂が閉校後も使われ続けている。閉校後も講堂が使われ続けるなど、講堂に対する地域住民の思いの寄って来たる所以が、子どもの時に親や祖父母と一緒に、あるいは親や祖父母が子どもや孫と一緒に、講堂でお昼を食べたという記憶にもあるのかもしれない。

以上のように、田山小学校の運動会は、小学校の運動会でありながら、地域社会にとっての「祭り」と化していたのである。しかし、このような運動会の「伝統」は、統合先の南山城小学校には引き継がれていない。運動会を通して、地域社会に埋め込まれた田山小学校と、地域社会からは物理的にも心理的にも距離のある南山城小学校という対比がみえてくる。

3-2-2 田山花踊り

さらに、田山小学校校舎と地域住民とのかかわりということで欠かすことのできないエピソードは、田山花踊りである。田山花踊りは、田山地区に伝承された雨乞いの儀礼であり、起源は江戸時代にまでさかのぼる。一時期中断していたが、1963年に約40年ぶりに復活し、以後現在に至るまで毎年行われている。

田山花踊りの流れをみておくと、まず田山小学校運動場で「愛宕踊り」の一番から三番までを踊った後、「入端」と称する行列が、田山小学校から諏訪神社までの300メートルほどの田山地区のメインストリートに30分ほどをかけて進み、ここまでが田山花踊りの前半部ということになる。入端が諏訪神社に至ると、そこで「庭踊り」を奉納し、これが田山花踊りの後半部ということになる。

田山花踊りの行列には、長谷川流棒術の流れをくむ棒振りの少年や、竹を二つに割りギザギザの溝をつけた「ささら」（その音は雷光をあらわす）を持った幼児、入端太鼓を打つ少年など、子どもも参加する。長らく男の子に限定されていたが、少子化とともに近年では女の子も参加している。踊り手は12人で、背中にシナイと称する2メートル弱の造花で飾られた棒をくくりつけて踊るため、体力が必要であり、20～30歳代が踊り手の中心となる。40歳を超えると踊り手からは引退し、田山花踊り保存会の役員となって田山花踊りにかかわっていくこととなる。

田山花踊りの前半部の会場が田山小学校の運動場であり、また、シナイが2メートル弱もあるため天井の高い所でないと準備できないという物理的な理由もあって、田山小学校の講堂が田山花踊りの準備会場となっている【写真10】。さらには、田山花踊りには子どもも参加し、当然子どもも田山花踊りの練習を行うことになる。となれば、学校やPTAは、田山花踊りにかかわっているのだろうか。そのことを、PTAの会長を経験されたLさん（40代）に尋ねたところ、次のように語ってくれた。

（田山花踊りに、学校とかPTAは関係があるんですか、という問いに対して…筆者注）ないです。花踊りの保存会の方から依頼して、依頼ちゅうか各家庭手紙書いて、練習まあ宜しく頼むちゅう

写真10. 田山小学校で行われる田山花踊り（中央奥は講堂）



ようなことで回しています。…昔はね、10月17日にずっと。だからそれはもう学校があったら、そらそこら辺は学校が調整つけてくれて、休みっちゅうか、昼から休みっちゅうことになるすわ。それは中学校になったかって田山の子だけ早く帰れるっていうような格好で。

現在田山花踊りは11月3日の祝日に行われているが、以前は10月17日に固定されており、保育園や小学校は午後は休園、休校の措置が取られ、笠置中学校においても田山地区の子どものみ午後から帰宅してよかったのである。ただし、田山花踊り本番に子どもが参加する際、あるいはそのための練習を行う際に、学校やPTAは、ノータッチであった。しかし、田山花踊りの出発点が小学校の運動場であり、また講堂は午前中から準備会場に使われており、しかもそれが平日であれば、少なくとも午後からは休校にせざるをえない。そして、目の運動場で田山花踊りが行われ、自分の教え子も参加しているので、田山小学校の教員も田山花踊りを見学したという¹⁷⁾。「学校と地域社会の連携」とは昨今の教育改革のキーワードであるが、学校が田山花踊りを積極的に「教材」として活用し、予め策定された指導計画にのっとり子どもたちに田山花踊りを経験させようとしていたわけではない。教育活動とは直接関係のないところで、地域社会の儀礼の重要なステージとして小学校校舎が使われている。ここにみられる学校というのは、学校教育の機能を担う装置としての学校ではなく、地域社会の寄り合い所としての学校なのではないだろうか。

田山小学校が廃校になった後も、田山花踊りという田山地区にとっての重要な儀礼に際し、田山小学校の運動場や講堂がそのメインステージの一つとして使用され続けている。廃校後もなお田山小学校校舎が、田山地区の地域住民にとっていかに大切なモノであるかは、2004年の田山花

踊り前日に聞き取りに応じて下さった、田山花踊り保存会長（当時）の次のような語りからも窺い知ることができよう。

実際、当初、廃校になったときは、話は「ここ（農業者トレーニングセンター…筆者注）から（田山花踊りが…筆者注）出たらどうや」という話もありましたんやけどな。でも、やっぱし去年を入れたら40年前からずっとやし、何とか田山小学校から出たほうがいいのちゃうかとね。それに今日もみんなで言ってたんですけど、「ここ（田山小学校…筆者注）にいたら心安らぐな。」と言ってたんですわ。ずっとそこで居た記憶がありますけえな。…これから花踊りがやる限りは、あっこ（田山小学校…筆者注）が発元に必ずなりますやろうな。たぶん、変わらへんやろうな。

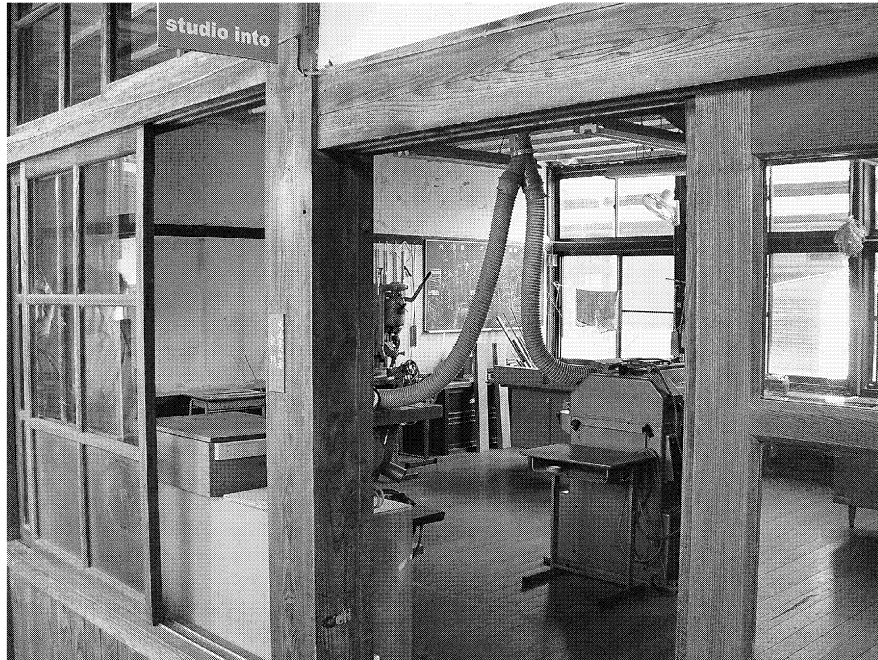
3-2-3 廃校舎活用

以上にみてきたように、田山小学校校舎に対して、田山地区に住む地域住民は強いかわりや愛着を有してきた。それゆえ、廃校後、廃校舎や跡地をどのように活用していくのかは、地域住民にとっても大きな関心事であった。廃校となって1年あまりが経過した段階で、Iさん（60代）は次のように語ってくれた。

資料館的な物に一部使いして、またいろんな方法で教室を有効利用したりとかいうことを言うているねんですけどな。で、近頃のお年寄り元気はよろしいんでな、グランドゴルフに、ゲートボールで、盛んにやらはったらどうしても場所的に、場所がないということで。で、今の田山小学校の校舎の、校門登っていったとこの右側、あれ講堂ですし、その一番前にあるのが北側校舎っていう、通称言うてますねんけど、それを取り壊して、ほして南側校舎を残して、ほしてグランドを拡張して、もうちょっと、お年寄りやとか、そういう人の練習場所やとか、娯楽としてゲートボール・グランドゴルフ。…それともう一つはね、実は、昭和28年に山城大水害が起きたんです。で、そういうことが将来にわたってあるかもわからんということで、講堂あるいは校舎、そして下に、公民館とかあるいは（農業者…筆者注）トレーニングセンター、婦人の家あるねんけど、河川が氾濫した時は使い物にならなせんのでね、低地でんでな。で、そういう時の住民の避難場所いうのも、…確保できてならんかったら具合悪いという、そういうことも計画、あるんでんねんけどな。去年そうしたアンケートとりまとめて、いまま田山区を考える会という組織、田山区に持ってましてな、そういういろいろな、跡地利用やとか、また集落の人たちの意見を集約したりとかいうようなのは、区長の諮問機関でんねんけどな、その人たちがお世話になって意見のとりまとめ、あるいは集約していく。

コの字型校舎のうち、運動場に近い北側の部分を取り壊して運動場を拡張し、そこを、ゲートボールやグランドゴルフの練習で使うと同時に、反対側の南側の部分を残すという案は、Iさん以外にも複数の方々が語られていた、田山小学校の廃校舎活用に関してもっとも有力な案であった。また、どのような案が採用されようとも、災害発生時の避難場所として、農業者トレーニングセンターよりも高台にある田山小学校校舎を確保し続けていくことの必要性が語られている。

写真11. 田山小学校の廃校舎を活用した木工工房



そして、実際に南側の校舎を残した場合に、その校舎をどう活用するかは、Iさんの語る資料館をはじめ様々な案が出たが、とりわけ南山城小学校に莫大な資金を投入したこともあって南山城村が財政難であるがゆえに、廃校舎活用が具体化されないまま3年あまりを経過することになる。その間、先述の田山花踊りの際や、盆踊り、ならびに盆踊りと並行して講堂で開催されたカラオケ大会の際に、廃校舎や跡地が活用され続けていた。¹⁸⁾

廃校舎の活用がなかなか具体化されない中、2006年5月に、村外在住者が教室を使って木工工房を始めることとなる。それがきっかけで、今度は田山地区に住む田山小学校卒業生もわら細工を始め、さらにガラス工房やペーパークラフト工房、そば教室が次々に始まることとなり、現在では田山小学校の廃校舎に田山地区内外の人々が同居している。木工工房では排気設備をつける以外に特に目立った改修はされておらず、また水道の設備のある理科室をそのままそば教室として使うなど、廃校舎活用にあたっては既存の木造校舎をほぼそのままの形で使っている【写真11】。このことは、校舎が工房のような使われ方にむしろマッチしていることを示しているとともに、様々な浮上した廃校舎活用案の実現にあたっての最大のネックとされてきた費用面は見事にクリアされることとなった。廃校舎においては、これまでと同様に田山花踊りが行われ、文化交流会などのイベントも継続的に開催されている。村外からの新しい風が、これまでの校舎と地域社会とのかかわりを呼び覚まし、廃校舎の再生を媒介したのである。

むすびにかえて

「学校と地域社会の連携」は昨今の教育改革のキーワードであるが、あたかもこれまでの学校が地域社会との接点がなかったかのような前提で語られている。そしてそのような前提で、地域社会をいわば「教材」化して、学校と地域社会とを教育的に「連携」させることを目指すのが、学校施設の複合化である。保育園や保健福祉センターが併設された南山城小学校は、学校施設の複合化の事例であるが、学校と併設施設の間で、かかわりが希薄であり、かかわりがあったとしても教育的に計画された「連携」以上のかかわりが起こりにくいものとなっている。また、学校と地域社会という観点でみた場合、地域住民にとっても学校とのかかわりが希薄であり、南山城村における学校施設の複合化のケースは、ツリー構造をなしているといわざるをえない。

一方で、田山小学校の校舎は、学校の成員である子どもたちや教員によって使われてきたのみならず、田山地区の地域住民との強いかかわりがあり、田山地区の寄り合い所としての機能や意味を担ってきたのである。しかも、青年団主催の演芸会や映画会、田山花踊りのステージとして田山小学校校舎が使われる際には、教育機関としての学校は関与せず、また学校行事である運動会ですら地域社会の「祭り」と化しており、田山小学校校舎と地域住民とのかかわりにおいて、「学校と地域社会の連携」という教育的な意図は存在しない。

学校はもちろん教育機関であるから、当然に校舎は教育的な機能を第一に想定して設計される。しかし、田山小学校校舎と地域住民とのかかわりにおいては、教育的に設計されているはずの校舎を、当初の想定から「逸脱」させて、教育以外の機能や意味を添付してきたのである。そして廃校となり校舎が教育的な機能を解除される時、校舎そのものはさほど改修されていないにもかかわらず、校舎と人々との多様なかかわりが生成するのであった。複合施設において学校が地域社会とかかわるためには、最初から学校や他の施設が担うべき機能を想定しきらず、担うべき機能を多少「逸脱」するための余地を残した方がよいのかもしれない。その方が、学校と地域社会との「意図せざるかかわり」が多様に生成するのではないだろうか。

今日の教育改革言説は、学校教育の内容や方法に焦点が当てられがちであり、学校論はそのままイコール教育論となりがちである。しかし、田山小学校校舎と地域住民とのかかわりが示唆するのは、学校という存在が、決して教育的な機能に還元しきれぬのではなく、多様な機能や意味を担うということである。ここには、学校を教育で語るというこれまでの学校論を超えて、学校を多様に描くための可能性が存在しているように思う。¹⁹⁾

注

- 1) 文部省「複合化及び高層化に伴う学校施設の計画・設計上の配慮について」、1997、同「高齢者との連携を進める学校施設の整備について」、1999、など。
- 2) 船越徹・飯沼秀晴「学校建築の新しい展開」建築思潮研究所編『建築設計資料16 学校』建築資料研究社、1987、長倉康彦「『開かれた学校』の計画」彰国社、1993、上野淳『未来の学校建築』岩波書店、1999、加藤幸次「オープン・スペースのもつ可能性」『オープン・スペース・スクール読本』（教職研修総合特集 No. 107）、1993、など。

- 3) 南山城村役場ホームページ (<http://www.vill.minamiyamashiro.lg.jp/>)。
- 4) 『田山小学校閉校記念誌 かけはし』, 2003。
- 5) 全国学校データ研究所『全国学校総覧 2007年版』原書房, 2006。
- 6) この共同研究は、科学研究費補助金基盤研究(c)「学校施設の複合化に関する研究」(平成16年度～平成18年度)、及び「地域社会における学校の統廃合と複合化に関する研究」(平成19年度～平成21年度)の助成を受けており、本稿はその研究成果の一部である。また、2004年～2005年にかけて行った田山区・高尾区における地域住民対象の聞き取り調査データについては、10のカテゴリーに分類し、編集を施したうえで、『学校施設の複合化に関する研究』(平成16年度～平成18年度科学研究費補助金研究成果報告書, 研究代表者四方利明), 2007, の「資料編」に収録している。ただし、本稿における聞き取り調査データの引用に際しては、編集前のローデータから直接引用している。
- 7) 2009年度より、南山城村, 和束町, 笠置町の3町村による相楽東部広域連合教育委員会が発足したことにもない、相楽東部広域連合立南山城小学校に名称変更している。
- 8) 先述の学校案内パンフレットには、工事費2,262,750千円と記載されている。
- 9) 南山城村役場ホームページによれば、2009年度南山城村一般会計予算は、2,016,636,000円である (<http://www.vill.minamiyamashiro.lg.jp/cmsfiles/contents/0000000/456/21tousyo.pdf>)。
- 10) 2004年8月訪問時の南山城保育園長からの聞き取りによる。
- 11) 2006年8月に実施した南山城小学校教員からの聞き取りによる。
- 12) Alexander, Christopher “A City is not a Tree” in *Architectural Forum*, Vol122, No. 1, No. 2, 1965. (押野見邦英訳「都市はツリーではない」前田愛編『テキストとしての都市』(別冊国文学・知の最前線)學燈社, 1984)。
- 13) 現在は、JR 月ヶ瀬口駅近くにある、笠置町南山城村中学校組合立笠置中学校に統合されている。
- 14) 有野喜一「田山小学校よ、さらば」前掲『田山小学校閉校記念誌 かけはし』, 9頁。
- 15) 以上、田山小学校の校舎沿革については、前掲『田山小学校閉校記念誌 かけはし』, 及び『平成13年度田山小学校学校要覧』を参照した。
- 16) 「運動会で飲酒、やっぱりノーが大勢…記者コラムに反響」『読売新聞』2004年10月15日夕刊(東京版)。
- 17) 9)に同じ。9)の南山城小学校教員は、かつて田山小学校の教員であった。
- 18) 2009年9月に行った、30～40歳代の田山小学校卒業生数名で立ち上げた、田山小学校校舎を活動拠点とする NPO 法人 ENJIN のメンバーに対する聞き取りにおいては、2009年夏の盆踊りが久々に田山小学校運動場で行われたとのことであった。一方で、2004年～2005年の聞き取りにおいて、2004年の盆踊りまでは田山小学校運動場で行われていたことを確認しているため、以降3、4年ほど、盆踊りが農業者トレーニングセンターグラウンドで行われていたものと推察できる。
- 19) このような試みの一つに、教育の境界研究会編『むかし学校は豊かだった』阿吽社, 2009, がある。筆者はこの書において、田山小学校の廃校舎活用を取り上げた「廃校舎と希望」、学校施設の複合化について考察した「複合施設と出会い」などの論考を執筆している。